

ルーマニア・メラ村の民族衣裳と ビーズ技法について

Bead Techniques and Folk Costumes in Mera, Romania

川口 素子

KAWAGUCHI, Motoko

I はじめに

「ルーマニアの民族芸術は、直接、自然の美を表現した物ではない。長い間の蒸留作用の結果、自然のモチーフそのままの写しは見出しにくい、もしくは殆ど存在しない」と C.D. ゼレティン氏が著書⁽¹⁾で述べているように、ルーマニアの刺繍は、いわゆる花や鳥などの図柄を装飾したものではない。

そこに見られるのは、赤色や、黒色、またそれらに黄色や茶色などを組み合わせた単純な色彩の、クロスステッチやハーフクロスステッチなどの刺繍である。つまり地域による色づかい、紋様の違いこそあれ、幾何学文様の区限刺繍⁽²⁾が基本である。

さて、ここで取り上げるのはトランシルヴァニア地方クルージュ県の通称カラティ（Calatei）といわれる地域に点在する村の一つ、メラ村の衣裳である。

メラ村の衣裳は、上で述べたルーマニアの衣裳の概念から外れたもので、明らかにそれとわかる花模様をビーズや刺繍で表した、色彩鮮やかに豊かに表現したものである。



図1 三月のメラ村

しかも今日でも、そうした装飾を施した衣裳は、婚礼やイースター、クリスマスなどといったキリスト教に関係する祭り、そして日曜礼拝に用いられている。

メラ村の衣裳が、なぜルーマニアの衣裳の概念と異なっているのか。それはこの村の歴史を繙くことで、何か糸口を見いだせるかもしれない。そこでまず、ハンガリーの歴史に簡単に触れてみる。

II トランシルヴァニア地方の略史

ハンガリー人（マジャル族）は、ウラル山脈付近の故地から、民族移動時代を経て、896年にはアールパードに率いられて現在の地に至った。

13世紀半ばの蒙古軍の侵入により、国土は一時荒廃したが、15世紀に入って、マーチャーシュ王の治世には、ハンガリーは中部ヨーロッパ随一の強国となった。1526年のモハーチの戦いでオスマン・トルコ軍に敗れ、以後約2世紀にわたって国土の大部分をトルコに占領された。それによって、西部と北部はオーストリアの勢力圏に入り、東部のトランシルヴァニア地方だけが、トルコの保護下で半独立公国となった。

その後17世紀末、オスマン・トルコにかわって、ハンガリー全土を支配したハプスブルグ家はハンガリー人に対して、経済的、宗教的圧迫を加えたため、トランシルヴァニアで大規模な民族的反乱が起こった。しかしこの反乱は失敗に終わり、オーストリアのハンガリー支配が確立する。

19世紀に入って、民族独立の機運が高まり、1848～49年の独立戦争で、ハンガリーはオーストリア軍と戦うが、ロシア軍の介入によって降伏する。ハンガリーは敗戦後、オーストリアの軍政に苦しむが、1867年のオーストリア・ハンガリー和約が成立すると、二重帝

国の一員となって一時的に安定した。さらに第一次大戦が起ると、ハンガリーはドイツ・オーストリア同盟側について参戦した。

ルーマニアは当初中立を保っていたが、1916年イギリス、フランス、ロシア3国協商側に立って参戦した。

その結果、3国協商側が勝利し、トリアノン条約で、ルーマニアはトランシルヴァニアを獲得し現在に至っている⁽³⁾。

現在トランシルヴァニアには、160万～200万人ものハンガリー人が住んでいるといわれている。

Ⅲ トランシルヴァニア地方・クルージュ県メラ村の地形と特徴

ルーマニアは、ほぼ中心部を北から南に東カルパート（カルパチア）山脈が走り、さらに西方に、南カルパート（別名トランシルヴァニア）山脈がある。その2つの山脈に囲まれた地域をトランシルヴァニア地方という。

もう1つの分類は、トランシルヴァニア地方の北部をマラムレシュ地方、西部をバナート地方といい、東、南カルパート山脈と西カルパート山脈にかこまれた（下図グレーの部分）地域をトランシルヴァニア地方という。この二つの分類方法は、用途により使い分けられている。（図2）

1910年の同国の国勢調査によると人口の割合は、ルーマニア人54%、ハンガリー人29%、ドイツ人11%であったが、1956年にはルーマニア人65%、ハンガリー人25%、ドイツ人6%と、トランシルヴァニア併合以後、ルーマニア人の割合が多くなっている。

またわずかではあるがチェコ人、スロバキア人といった人々も共存する。

こうした多民族によって構成されたトランシルヴァニアは、それぞれの村や町で民族独自の衣装（図3、



図3 トランシルヴァニア地方の衣装 図4 同衣装

図4）を伝承する素地があったと言える。

ここに取り上げるメラ村は、トランシルヴァニアの中心都市、クルージュ・ナポカから、西方約15kmに位置している。この村を含め、さらに西方約45kmに点在する村々一帯をカラティ（Calatei）と言い、ハンガリー名ではカロタセグ（kalotaszeg）とよばれる。

このカラティには、14世紀にはすでにハンガリー人が居住していたといわれ、現在、ハンガリー人が3分の2、残りの3分の1はロマン人である。

メラ村（図1）は東西約2kmの範囲に、現在約500世帯、1,180人が居住し、およそ80%の人が馬、牛、豚、鶏、水牛などを飼育するほか、農業に従事し、ほぼ自給自足の生活である。残りの人々はクルージュ・ナポカで教師、商業、機械技師などで生計をたてている（2005年2月、現地での聞き取り調査）。

女性の30%は、ビーズで組みあげたネックレス⁽⁴⁾やイースターエッグ⁽⁵⁾などを土産物用に製作し、ハンガリーのブダペストで売って生計の一部にあてている。

メラ村は折につけ現在でも美しい民族衣装を纏うところとして知られ、また赤系の花模様を家具にペインティングし、ピローケース、飾り布等にも美しく刺繍を施し、室内を飾るところである。

Ⅳ メラ村・衣装の構成

メラ村の衣装の構成は、袖や身頃にマッシュルームプリーツ⁽⁶⁾を畳んだブラウスの下にアコーデオンプリーツを畳んだロングスカートを着け、そのスカートの上にエプロンを着ける。さらにブラウスの上にはベストを羽織る（図5）。

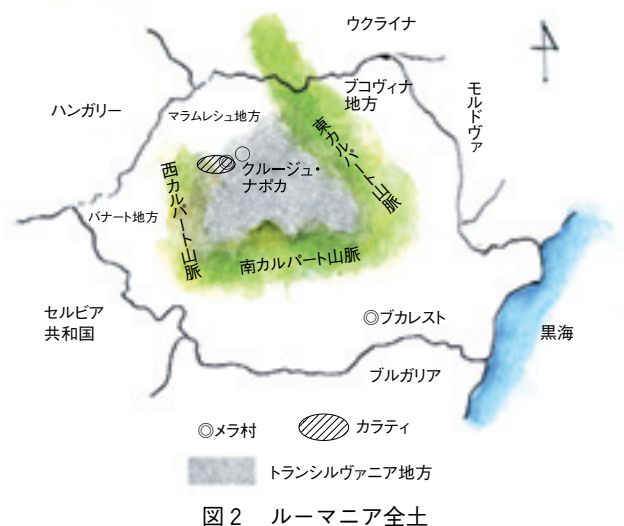


図2 ルーマニア全土

このエプロンやベストには、ビーズを用いた豪華で色鮮やかな刺繍が施されている。

私が興味を持ったことは、この豪華に見えるビーズ刺繍が、いかなる技法や方法で製作されたものか。また使われている素材はなにかということであった。

また私たちの身近に入手出来る素材で製作可能かどうかについても考察してみる。

ルーマニアの民族衣裳の多くは、年代、用途に関係なく用いられる。通常、婚礼や晴れ着として作られたものは、葬儀に、また日曜礼拝に、そして古くなると日常着として用いられる。

ただしここで見る衣裳は婚礼、祭り、日曜礼拝用として用いるもので、葬儀や、着古したものを日常着として用いることはなく、日常着は別につくられる。それらはかつてはざらざらした原毛や麻、亜麻であったが、現在は柔らかなウールや木綿にかわっている。

これを用いているのは50歳以上の年配の婦人(図6)である。



図5 盛装した娘(左、中央)と既婚者(右)

未婚者は、頭に貞操の証でもある帽子、コロニツァ⁽⁷⁾(図5中央、左側)を被る。結婚式が終わり既婚者になると、刺繍を施した帽子、フークトゥ⁽⁸⁾を被り、ビーズのベルト、チ

プケ⁽⁸⁾でその帽子を固定する。

さらにその上から、スカーフ、パティク⁽⁹⁾で覆う(図5右)。また、未婚者はベスト後中心より、裾近くまである長さの花柄織リボンを数本垂らし、そのリボンと一緒にビーズ刺繍を施した飾り紐⁽¹⁰⁾を下げる。そして足には赤や黒色の短靴またはブーツ、パントフイを履く(図9)。



図6 年配の婦人



図7 成人女子の衣裳



図8 少女の衣裳



図9 娘を見送る母親

スカーフは既婚者、未婚者とも日常にも使用する。

V 衣裳の特徴と製作

メラ村の衣裳は、どのような素材を用い、どのような方法で製作されるのだろうか。次に其々の衣裳についてみる。

1. ブラウス(カマーシャ・ロトゥンダ)(Cămașă rotunda)

カマーシャ(Cămașă)とはブラウス、ロトゥンダ(Rotunda)とは膨らみのことで、つまり膨らみのあ

るブラウスのことである。

素材は、白色木綿地（図5中央）、もしくは小花柄プリント（図5左右）のウール地を用いる。

白色ブラウスの、白は純潔をあらわす。さらに白く見せる工夫として、ごく少量の青インクを垂らして布地を染め、いっそう白く見せる工夫をしている。

身頃や袖にはマッシュルームプリーツ⁽⁶⁾を畳み、襟や袖口に赤色（図7）や黒色毛糸で刺繍（図8、図10）を施す。刺繍の赤や黒色の使い分けは特になく、赤色で刺繍するのが一般的である。

また袖山の部分に刺繍（図5中央）する形は、未婚をあらわしている。



図10 ブラウス（黒色で刺繍）

◆ブラウスに関する製図、製作は「紀要第3号」⁽¹¹⁾を参照。

2. ベスト（ベスタ）(Vesta)

ウールの花柄プリント地（図7）や、無地ベルベット地（図8）にビーズ刺繍を施したもの、また毛糸刺繍（図5中央、右）で全面を埋めるものなどがある。

刺繍を施したのち、打ち合わせの左右に数個の大きなカギホックを付け、そのカギホックにリボンを交差させながら掛け、最後に結んで前を閉じる形（図7）と打ち合わせに付けた数個のカギホックをかけて留める形（図5中央、右）がある。いずれも体型にフィットさせたものである。

また前を開けたまま使用する形（図8）もある。

こうした形になる以前は、専用の職人によって製作



された革に刺繍を施したものが用いられた。（図11）

図11 革のベスト

◆製作およびビーズ刺繍は、p.92「2. ベストのビーズ技法」で解説する。

また用いた素材の試料はp.100に別記した。

3. プリーツスカート（フスタ・プリサティ）(Fusta Plisata)

スカートのことをフスタ（Fusta）、プリーツのことをプリサティ（Plisata）といい、プリーツスカートのことである。

ウール地や木綿地の無地、もしくは小花柄プリント地を用いてプリーツを施す。

着装方法および製作方法にはフラットとラウンドの2つの形がある。

フラット「図7 成人女子」の形は、前中心を20cmほど重ねて着ける。

ラウンドの形は前中心を縫い合わせたもので、その理由は「図8 少女」の場合、前がはだけない配慮から。そして「図9 娘」は、輪になっている前中心を、裏返してウエストに挟み込む形態からである。

裾をウエストに挟み込むのは、騎馬民族時代の名残、つまり騎乗するための利便性からきている。

しかしこの2つの、形による使い分けはない。

製作

着丈90cmの「図7 成人女子」は布（92×392cm）を横地に扱い、裾に沿って1.8～3.6cm幅のテープ12本（全体で31.5cm）をミシンで止めつける。着丈73cmの「図8 少女」の場合は縦地（90×225cm）を用い、テープはスカート丈が短い本数、寸法とも少ない。着丈90cmの「図9 娘」は布（92×302cm）を横地に扱い、裏側の裾に沿って幅12cmの花柄刺繍を施したラシャ地を止めつける。

それらの作業の後、布地に湿り気を与え1cm幅の縦襷を畳み、アイロンでプリーツを安定させる。

最後に共布でベルト（芯なし）を付け、その両端に紐（120～150cm）を付ける。

裾部のリボンの本数、刺繍を施した幅、図柄などに決まりはない。

プリーツスカートの形成に、かつては焼きたてのパンを用いた。重さ約3kg、直径約30cm、厚み12～3cmの円形のパンを6個使い、プリーツを畳んだ布の上に置きプリーツ加工した。その後、炭入れアイロンに変わる1760年ごろまでこの方法がとられた。

着用した後は、スカートの大きさの新聞紙または同大の紙を、スカートの下に置き、上部、裾部に1人ずつ立ち、2人が同時にプリーツを畳み込みながら下に敷いた紙ごと巻きあげ、円筒状にする。

これは次に使用するまで、プリーツの形状を保ち、新聞紙で巻くことで防虫効果の役割も兼ねている。巻いたスカートは専用のチェストに保管される⁽¹²⁾。

◆用いた素材の試料はp.99に別記した。

4. エプロン（ショート・プリサータ）（Sort plisata）

エプロンをショート（Sort）、畳むことをプリサータ（Plisata）といい、プリーツエプロンのことである。

無地もしくは花柄プリント地のウール地や木綿地を用い、スカートよりやや薄手の布地を用いる。メラの衣裳の中でも、ビーズやテープ、刺繍を施した最も華やかな部分である。

プリーツを2～4つに分け、その間に技法や素材を組み合わせる。例えばウール地、木綿地、絹地の素材にテープ、ビーズ刺繍、糸刺繍、鉤針編みなどを用い、その中にルーマニアステッチ⁽¹³⁾や、スモッキングの技法などを取り入れた多彩なものである。



図12 プレート

つぎに基本的なエプロンの構成を「図12」で簡単に説明する。プリーツを施した布を3枚に分け、その3枚のプリーツ布の間に2枚の縦長のパネル、「縦プレート」を入れ、綴じ合わせる。ウエストより3～4 cm ほど下がったところに横長のパネル、「横プレート」を上に乗せて付け、ベルト位置にテープを付ける。

「縦プレート」、「横プレート」（図12）は説明上の名称であり、ここで用いるプレートとは、装飾を施した、扁平で長方形のものをいう。

説明上、エプロンの「縦プレート」、「横プレート」に施された素材や技法を、次の5つに分類した。

A「刺繍テープ」、B「織りテープ」、C「鉤針編みテープ」、D「刺繍パネル」、E「ビーズパネル」

A 「刺繍テープエプロン」（Embroidery tape apron）

プリーツを畳んだウール地に、刺繍を施したテープを付けたものである。

製作—平織ウール地にプリーツを施す。9 cm 幅の木綿テープにブロード程度の木綿地で裏打ちし、絹刺繍糸で花柄模様を刺繍する。その刺繍テープを、周囲、中央およびその左右、そして裾部に鉤型や円形を止めつける。さらにウエストより5 cm ほど下に、刺繍を施した刺繍パネル（横プレート）を止めつけ、ベルト位置に刺繍テープを付ける（図13、図14）。



図13 「刺繍テープエプロン」



図14 部分（下）

B 「織りテープエプロン」（Weaving tape apron）

プリーツを畳んだウール地に、織りテープを付け、中央の剥ぎにルーマニアステッチを入れ、横プレートにスモッキング技法（「スモッキングパネル」参照⁽¹⁴⁾）を施したものである。

製作—紋織りウール地の中央を2つに分け、その2枚の布を、中細毛糸を用いてルーマニアステッチ⁽¹³⁾で繋ぎ、全体に縦プリーツを施す。

横プレートには隙間なく細かなスモッキング技法を施す。8 cm 幅の絹地花柄の織りテープを用いて周囲、また裾部分に鉤形や円形を止め付ける。最後にウ



図15 「織りテープエプロン」



図16 部分（下）

エストにテープを付ける。(図15、図16)

C 「鉤針編みテープエプロン」(Crochet tape apron)

プリーツを施したウール地の間にビーズパネル (p. 7「ビーズパネル」の項参照)を入れ、鉤針編みレースを付けたものである。横プレートにはビーズダーニングステッチ (pp.90-91「ビーズダーニングパネル」の項参照)を施したものである。

製作—プリーツを施したウール地を4つに分け、その間に、刺繍を施した縦プレートを挟み込む。中細毛糸を用いて、9cm幅の鉤針編みテープを作り、周囲、鉤形、円形に止めつける。

横プレートにビーズダーニングの刺繍をのせ、ウエストにテープを付ける(図17、図18)。



図17 「鉤針編みテープエプロン」 図18 部分(下)

D 「刺繍パネルエプロン」(Embroidery panel apron)

ビーズを施したウール地に、刺繍糸を用いて装飾したパネルをいれたものである。

製作—必要な布幅を縦に3つに分け、その間に10cm幅の刺繍した縦パネルを挟む。横プレートに、スモッキング技法 (p.99「スモッキングパネル」参照)を施し、最後にウエストにテープを付けて仕上げる(図19、図20)。

刺繍パネルは、縦プレート、横プレート双方に用いることができる。

刺繍技法はチェンステッチ (Chain stitch)、サテンステッチ (Satin stitch)、アウトラインステッチ (Outline stitch) などを用いる。(図19、図20)



図19 「刺繍パネルエプロン」



図20 部分

E 「ビーズパネルエプロン」(Bead panel apron)

プリーツを施したウール地の間に、「ビーズパネル (厚紙芯を毛糸で被い、その上にビーズ刺繍したもの)」を入れ、横プレートにはビーズダーニングステッチを施したものである。

◆製作およびビーズ刺繍は、「1. エプロンのビーズ技法」で述べる。

VI メラ村を中心とした衣裳のビーズ技法

ルーマニア民族衣裳でビーズを多く用いるのは、トランシルヴァニア地方を中心とした周辺の地域である。なかでもメラ村は、ビーズを用いて最も高度の技術と艶やかな技法を、エプロンやベストに施す地域として知られる。このようなビーズの技法は衣裳にとどまらず、糸で組み上げたネックレス⁽⁴⁾、帽子飾り⁽¹⁵⁾、イースターエッグ⁽⁵⁾などにも生かされている。

またトランシルヴァニア地方の東北から、ブコヴィナ地方にかけては、メラ村とは異なったビーズ技法(図63)をブラウスに見ることが出来る。

次にビーズ技法の特徴、製作方法をエプロン、ベスト、ベルト、ブラウスの順に述べ、それらを考察する。

1. エプロンのビーズ技法

縦プリーツの間に入る縦プレートに『ビーズパネル』、腹部の横プレートに『ビーズダーニングパネル』、そして縦プレート、横プレートの周囲にビーズを施したテープが『ビーズテープ』である。

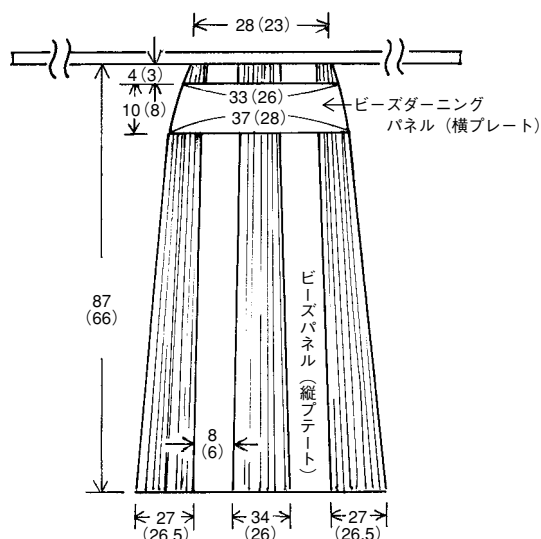


図21 エプロン (製図)

() 内は少女の寸法 単位は cm

数字は出来上がり寸法で、各辺に 1 cm の縫い代をつけて裁断する。(例えば 36cm であれば 38cm が必要) ただし成人女子のブリーツ両端は耳を使用するため縫い代は必要としない。ウエストに付けるテープは、全体の長さ成人女子 3 m、少女 2 m である。

(1) 『ビーズパネル』、(2) 『ビーズダーニングパネル』、(3) 『ビーズテープ』の順に製作工程を説明する。

(1) 『ビーズパネル』 (Bead Panel)

ビーズパネルは「縦プレート」に用いる。

木綿地を当てた厚紙に毛糸で刺繍し、その上をビーズ刺繍するものである。

幾何学模様や花模様のビーズ刺繍は、台紙にしっかり固定され、また毛糸に埋まることがない方法である。

1) 図柄—花模様、幾何学模様、鳥模様、ワッペン模様など

2) 材料—当て紙 厚紙

素材 パルプとぼろ

厚さ 0.5mm

当て布 生地名 ブロード

素材 木綿100%

厚さ 0.15mm

毛糸 素材 ウール100%

「成人女子」中細、「少女」合細撚糸

ビーズ 竹ビーズ 2mm (幅) × 7.4 ~ 8mm

丸ビーズ 2mm (幅) × 2 ~ 2.2mm

セロハン紙 中厚

止め糸 40番、50番カタン糸



図22 成人女子、エプロン



図23 少女、エプロン

3) 製作

ここで参考にする「成人女子」と「少女」は製作方法が異なるので製作方法を分けて説明する。

① 厚紙芯を作る (縦パネル)

「成人女子」は 8 × 89cm (縦 89cm には、ベルトに入る分、及び裾の折り曲げ分、各 1cm が含まれる) の縦長の厚紙の上に、厚紙よりやや大きい縦縞柄の木綿地を置き、下 (裾) は布ごと 1cm 折り返す。台紙の縁より 0.8cm 前後入ったところに粗くミシンを掛ける。厚紙からはみ出た両脇の布を切り取る。これを「厚紙芯」とする (図24)。



図24 成人女子



図25 少女

「少女」の場合は7.5×67cm（縦67cmには、ベルトに入る分、1cmが含まれる）の厚紙の上に、厚紙より1cmほど大きめの格子柄の木綿地を置き、上部を除く3方を厚紙に沿って折り曲げる。その上に縁より0.8cmほど入ったところに粗くミシンを掛ける。（図25）これを「厚紙芯」とする。

② 毛糸で被う

「成人女子」は中細毛糸、「少女」は合細毛糸を用いて、「厚紙芯」のミシン目のすぐ際を、布地だけを掬ってサーフェス・サテンステッチ（Surface satin stitch）を施し（図26）、これを「台紙」とする。

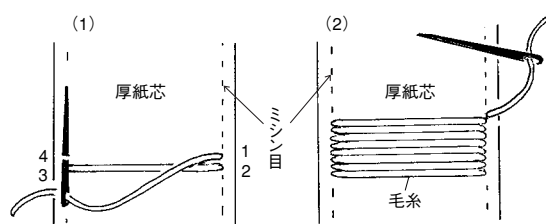


図26 サーフェス・サテンステッチ（台紙製作）

③ 図柄を印す

「台紙」の上に刺繍の図柄を印す。幾何学模様、花模様によりそれぞれ図案の印しかたが異なる。

「幾何学模様（成人女子、グリーン地）」は「台紙」の上に襷糸で交差（×）及び、十字（+）を印す。（図27）

「花柄模様（少女、白地）」は、図柄の上にセロハン紙を置き、ボールペンでセロハン紙に図柄を写す（図29）。そのセロハン紙を「台紙」に襷糸で留めつける。



図27 幾何学模様 印つけ（表）実物大

台紙（毛糸でサーフェス・サテンステッチ）の上から、襷糸で、十、×を印す

④ ビーズ刺繍『ビーズバックステッチ』（Bead back stitch）をする

パネルに用いる技法は、バックステッチ（図31）を用い、「厚紙芯」まで針を通し、しっかり止めつける。

「図27幾何学模様」は、まず中心の円形を刺し、ハートの中と外にあたる部分の竹ビーズを、計12本刺す。最後にそれを囲むように丸ビーズでハート形を刺す。最後に放射状に伸びた部分を竹ビーズで刺す。（図27）

丸ビーズは、1回で掬う数を4粒ぐらいにし、カーブのあるところはビーズの数を少なくし、2～3粒ぐらいである。

「図29花柄模様」は花の輪郭をとり、その間を埋めていく。花の茎、葉脈を刺し、それを囲んで葉の部分の刺す。最後に上下の小花を刺す。刺しあがったらセロハン紙を取り除く。しかしそのまま取り除かないで使用することもある。

セロハンを使って刺繍する形は、刺繍の順序が違って下図があるので製作できる。（図29）



図28 幾何学模様（裏）実物大

カタン糸50番を2本取りで、バックステッチ（図33）で止めつける



図29 花柄模様 印つけ（表）実物大

セロハン紙にボールペンで図案を写しとり、台紙（毛糸でサーフェス・サテンステッチしたもの）に襷糸で止めつける

止め糸は、白色または赤色のカタン糸50番を2本取である。(図28、図30)

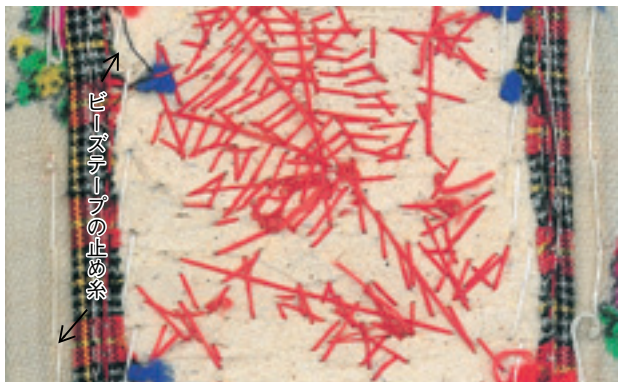


図30 花柄模様 (裏) 実物大

カタン糸50番を2本取りで、バックステッチ(図31)で止めつける

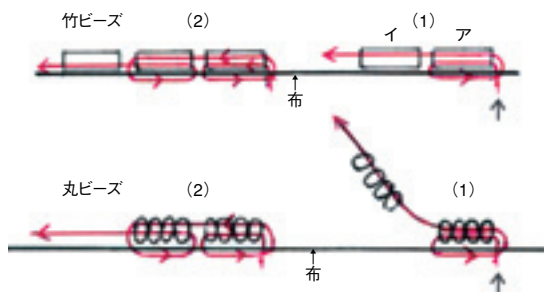


図31 ビーズバックステッチ

ビーズバックステッチの方法

布の下から針を出しビーズを通し、布を掬ってもとの所に戻る。さらに前に通したビーズと新しいビーズを通し、布を掬ってもとのところに戻る。この作業を繰り返す(図31)。

「ビーズパネル」の図柄は、その地域で古くから伝承されてきたものを用いるか、もしくはそれを変化させたものである。しかしその図柄は豊富で、各素材を組み合わせるとかなりの数になる。ここではその一部を紹介する(図32、図33、図34、図35、図36)。

(図34、図35、図36は「A mérai kötény」⁽¹⁶⁾より転写)

4) 考察

「厚紙芯の厚紙」について

メラ村の「厚紙」を分析する⁽¹⁷⁾と、木材のパルプと木綿繊維のぼろを合わせた厚さ0.5mmのものである。この紙質は表面を覆う布、さらに重ねて施す毛糸刺繍やビーズ刺繍に対応出来ること、つまり刺繍針が通る硬さ、毛糸刺繍、ビーズ刺繍の糸の引き締めで厚紙が変形しないことである。

日本で入手出来る、上の条件に近い厚紙のうち、次



図32 幾何学的花模様 竹、丸ビーズ



図33 花柄模様
丸ビーズ



図34 幾何学的花模様
毛糸と丸、竹ビーズ



図35 花と鳥模様
竹ビーズと刺繍糸



図36 ワッペン模様
丸ビーズと変形・竹ビーズ

の「土佐張子 A」、「土佐張子 B」、「人形和紙」、「特厚口半晒し手漉き和紙」を選び、素材、性質を見た。

「土佐張子 A」は楮で厚さ0.4mmである。

「土佐張子 B」はパルプと、数種の古紙が入り、厚さは0.6mmである。しかし紙に腰がなく、細かな針の出し入れに破れやすい欠点がある。

「人形和紙」はパルプで厚さは0.25mm。薄いため毛糸で被う作業中に湾曲していき、厚さの点で不向きである。

「特厚口半晒し手漉き和紙」は楮で、厚さ0.99mm。厚すぎる点でエプロンには不向きと考える。

この中で「土佐張子 A」が、やや厚さに欠けるものの、腰があり風合いでも製作に適していた。

「厚紙を覆う布（木綿地）」について

表面を毛糸で被う作業に必要とするもので、布地は厚くなく、毛糸が刺しやすいことが条件になる。

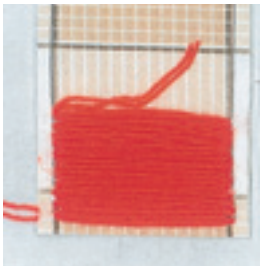


図37 当て布を毛糸で被う

衣裳の残布、つまり無地の木綿地や花柄のウール地を用いず、厚みのない木綿地に、格子柄（図37）や縞柄を用いている。これは毛糸で横幅5～7cmを曲がることなく平行に拘うための定規にしていると考える。

「厚紙と当て布の幅」について

2枚が同じ幅でも、また当て布を大きく取り厚紙を包み込む方法でも、刺繍の出来上がりは同じである。当て布で厚紙を包み込む方法は、縁の保護と考える。

ビーズ刺繍、「ビーズバックステッチ」について

メラ村のビーズ刺繍は、不安定な毛糸の上であるにもかかわらず、まったくビーズに緩みがない。

その理由は、技法に、完全なバックステッチを用いていること。もう1つは、止め糸を2本取り（図28、図30）にしていることである。仮に1本取りにして糸

の引きを加減するなら、台紙の毛糸にビーズは密着出来ない。

またビーズを続けて2個（ア、イ）通すこと（図31）で、ビーズとビーズの繋がりを良くし、美しい形状を作り上げている。

（2）『ビーズダーニングパネル』（Bead darning panel）

「横プレート」に用いる。

ビーズ織りのように見える刺し方で、ビーズ区限刺繍の1つである。コングレス地やメッシュ地を用いて、ビーズダーニング刺繍してある。

この技法はコングレスやメッシュの布目にビーズが埋もれない方法である。

1）図柄—幾何学模様

2）材料—「成人女子」

表布 生地名 コングレス
素材 麻100%
組織 平織
密度 経5 緯5（本/cm）
厚さ 0.55mm

ビーズ 丸ビーズ1.4～2.1mm（幅）×2.6～2.8mm

当て布 晒し地程度の木綿地

止め糸 40番カタン糸

「少女」

表布 生地名 メッシュ
素材 ナイロン100%
組織 平織
密度 経6.5、緯6.5（本/cm）
厚さ 0.55mm

エンジ木綿布 厚手のガーゼ程度

ビーズ、当て布、止め糸は「成人女子」と同一

3）製作

ここに用いる「成人女子」と「少女」の製作方法が異なるので分けて説明する。

① 土台布を準備する

パネルの幅は、「成人女子」は横37cm、縦10cm（図38）、「少女」は横28cm、縦は8cm（図41）で、周囲1cmの縫い代を入れた表布と当て布を準備する。

表布は、「成人女子」はエンジ色のコングレス地（図40）、「少女」は紺色のメッシュ地（図43）を用い、メッシュ地の下に、エンジ色の木綿地を当てる。

裏側に「成人女子」、「少女」とも晒しや厚手のガーゼ地程度の当て布をする。なお当て布は、無地、柄また色には拘らない。



図38 成人女子、ビーズダーニングパネル

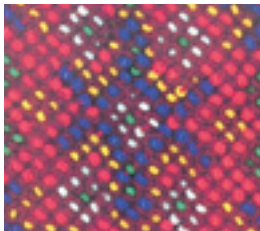


図39 部分

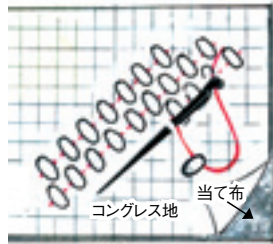


図40 斜刺し



図41 少女、ビーズダーニングパネル



図42 部分

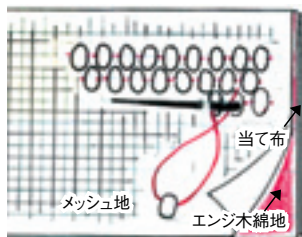


図43 横刺し

表布にナイロンメッシュ地を用いるようになったのは1980年ごろからである。

② 図柄を決める

ビーズの色で図柄を構成するもので、幾何学模様を用いることが多い。手持ちの図柄から選ぶ。

③ ビーズ刺繍する

好みの図柄（図44）を用意し、その図柄に沿って

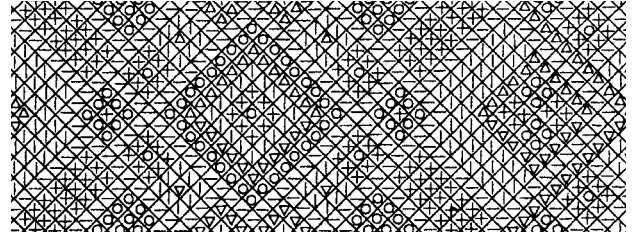


図44 図柄サンプル

ビーズダーニングステッチ（Bead darning stitch）する。

裏から出した針に、ビーズを1粒通し、布目を1本掬う。またビーズ1粒とり布目1本掬い、これを繰り返す。同時に2、3粒を掬うことはない。

掬い方は、織り糸だけでなく、当て布ごと掬う。

また別の方法として、同じ色だけを刺す方法がある。例えば、まず赤色の部分を刺し、次に別の糸で青色の部分を刺す（布の裏側には2本の糸が渡る）。

刺し方に「斜め刺し」と「横刺し」の2通りがある。

ここで「斜め刺し」を用いているのは「成人女子」（図39、図40）で、「横刺し」を用いているのは「少女」（図42、図43）である（図42、図43）。

4）考察

「当て布」について

コングレス地やメッシュ地などの粗い布目にビーズを止めつけることは出来ない。理由はビーズが布目に入り込んでしまうことや、ビーズを一定の方向に止めつけることが難しいからである。

「当て布」をするのは、ビーズが織り糸の間に入るのを防ぐだけでなく、ビーズの向きも安定し刺繍が容易なことである。

「少女」に用いるエンジ木綿地はメッシュ地から当て布が透けることを防ぐためである。

また布を重ねることで、下に流れるプリーツが安定し、プリーツ部分との厚さのバランスも取れる。

刺す方向は、布地、「成人女子」、「少女」といった分け方ではなく、図柄（同じ色が多く並ぶ方向）で決める。

「横パネルの寸法」について

パネルの幅は、「成人女子」、「少女」で決めるものではなく8～10cmの範囲で自由である。

パネルの寸法を、「成人女子」（図21、図38）で見ると、布幅は37cm×10cmで上下同寸法である。

しかしエプロンの完成後、上部分は33cmになっている（4cm減少）。これはプリーツの上に止め付ける段階でいせ込んでいる。つまりダーツの役割と考えられる（「少女」は2cmのいせ込みである）。

(3) 『ビーズテープ』 (Bead tape)

サテンテープ (リボン) や金、銀テープ (リボン) にビーズ刺繍を施したものである。「ビーズパネル」や「ビーズダーニングパネル」の周囲に施し、より華やかな効果を出す。

1) 図柄—ジグザグ模様 (A)、菱形模様など

2) 材料—「成人女子」

テープ名 サテン
素材 絹100%
組織 朱子織
厚さ 0.3mm (幅)

止め糸 40番カタン糸

「少女」

テープ名 金色リボン
素材 ポリエステル100%
組織 平織
厚さ 0.2mm

止め糸 「成人女子」と同一

3) 製作

① テープを止めつける

パネルの周囲にサテンテープや金、銀糸のテープを縫糸で止める。

「成人女子」は黄色のサテンテープ (0.8cm 幅) を用い、「少女」は銀色テープ (1.2cm) を用いる。

つぎに、カタン糸50番程度を用いて、テープの端を約1cmの間隔で、厚紙芯まで針を通して (図28、図30) しっかり止め付ける。

② 図 (ビーズ) の位置の決め方

特に印することはなく、感覚で刺す。

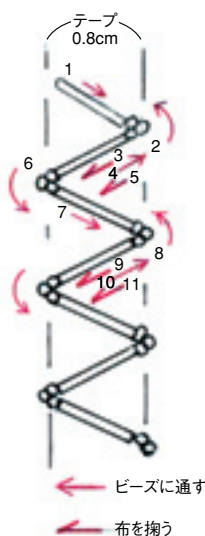


図45 ジグザグ模様 (A)
(変形バックステッチ)

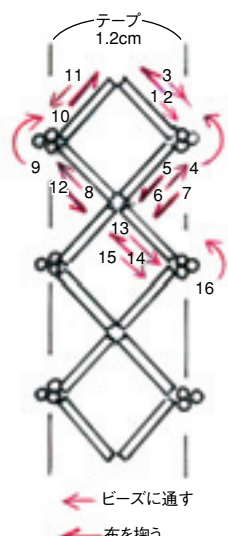


図46 菱形模様
(変形バックステッチ)

③ ビーズ刺繍する

止めつけられたテープにビーズバックステッチ (Bead back stitch) で装飾する。

装飾の方法には2つの図柄がある。

1つは「ジグザグ模様 (A)」 (図27、図45) を、0.8cm 幅のサテンテープに施し、「成人女子」 (図22) で扱われている。

もう1つは「菱形模様」 (図29、図46) を、1.2cm 幅の金糸テープに施し、「少女」 (図23) で扱われている。

止め糸はいずれも白色のカタン糸40番程度である。

次に述べる2. ベスト、3. ベルトは、1. エプロンの技法と重なるものも見られるが、用いられる布地、素材で扱いかが異なる。

2. ベストのビーズ技法

ウエスト丈で身幅にゆとりの少ない形態に、首刎り、袖刎りに沿ってテープを付け、その上にビーズ技法を施すものである。

「成人女子」

1) 図柄—ジグザグ模様 (B)、幾何学模様

2) 材料—表布 生地名 モスリン

素材 ウール100%
組織 綾織
密度 経30 緯21 (本/cm)
厚さ 0.2mm

裏地 生地名 ラシャ

素材 木綿100%
組織、密度とも起毛のため計測不可能
厚さ 1.3mm

パイピング

生地名 ブロード
素材 木綿100%
密度 経24 緯24 (本/cm)
厚さ 0.4mm

テープ 金色0.7cm (幅)
銀色0.7、1.3cm (幅)

ビーズ 竹ビーズ 2mm (幅) × 7.4 ~ 8mm
丸ビーズ 2mm (幅) × 2 ~ 2.2mm

「少女」

1) 図柄—ジグザグ模様

2) 材料—表布 生地名 ベルベット

素材 木綿100%
組織 漆毛織
密度 —

厚さ 0.55mm
 裏地 生地名 ラシャ
 素材 100%
 組織、密度とも起毛のため計測不可能
 厚さ 0.7mm
 パイピング
 生地名、素材、密度、厚さとも「成人女子」と同一
 テープ 銀1.3cm (幅)
 綿レース1.2cm (幅)
 ビーズ 竹、丸ビーズとも「成人女子」と同一



図47 成人女子、ベスト



図48 少女、ベスト

3) 製作

「成人女子」と「少女」は製作方法が異なるので分けて説明する。(図47、図48)

① 1枚仕立てにする

「成人女子」は、花柄プリント地と裏布、ラシャ地、「少女」は、赤色ベルベット地と裏布、ラシャ地を裁断する(図49、図50)。

2枚合わせて襦をし1枚仕立てにする。

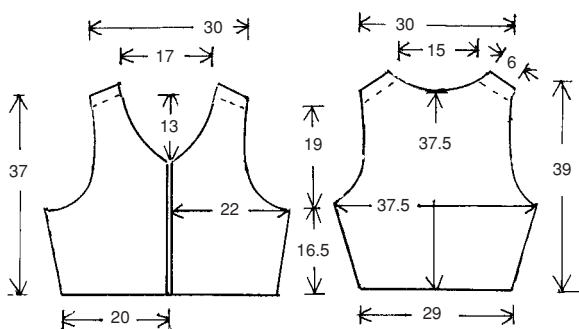


図49 成人女子 (製図)

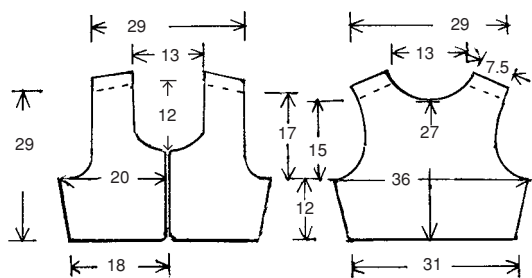


図50 少女 (製図)

② 脇剥ぎ及び縁取りをする

前後身頃の脇剥ぎをした後、周囲を赤色の木綿地(ブロード程度)で1cmほどの縁取りをする。

③ テープを止め付ける

首割り、袖割りに沿って、テープを止める。

「成人女子」(図51)は、金色テープ(0.7cm幅)、銀色テープ(0.7cm幅および1.3cm幅)を用いる。

1.3cm幅の銀色テープは、薄地のため同じ幅の白色テープを裏に当てる。各テープを襦で押さえ、テープの縁を1cmほどの間隔で止め付ける。止め糸はカタン糸40番程度である。

「少女」(図52)は銀色テープ(1.3cm幅)と、木綿レース(1.2cm幅)を用いる。両テープとも襦で押さえテープの縁にミシンをかける。

④ ビーズ刺繍する

「成人女子」の0.7cm幅の金色、銀色テープは、竹ビーズ、丸ビーズを用いてジグザグ模様を、「ビーズコーチングステッチ」(Bead couching stitch 図51、図53)を施す。

方法は、カタン糸50番程度に竹ビーズ、丸ビーズを図柄に沿って順に通しておく。

止め糸はカタン糸50番または60番2本取りを針に通し、山形の頭をコーチングステッチする要領でビーズを止めていく。

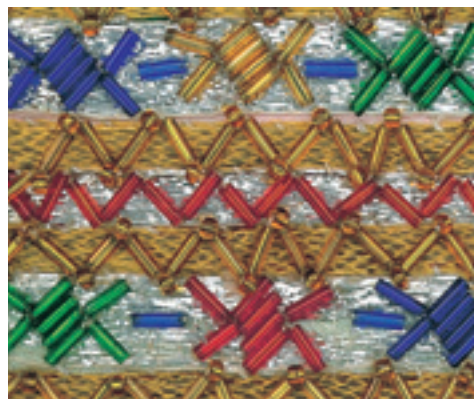


図51 ビーズ刺繍 成人女子 実物大



図52 ビーズ刺繍 少女 実物大

1.3cm 幅の銀色テープの幾何学模様は、「ビーズバックステッチ」(Bead back stitch 図31)の技法を用いる。

「少女」の場合、木綿レースは、竹ビーズを用いて「図45ジグザグ模様A」の技法で刺繍する。銀色テープに施した花柄模様は、約2.5cm 間隔で印を付け、「図31ビーズバックステッチ」の技法で図柄に沿って刺繍する。(図52、図31)

いずれもビーズの止め付けは、裏に当てたラシャ地までしっかり拘う。(図54)

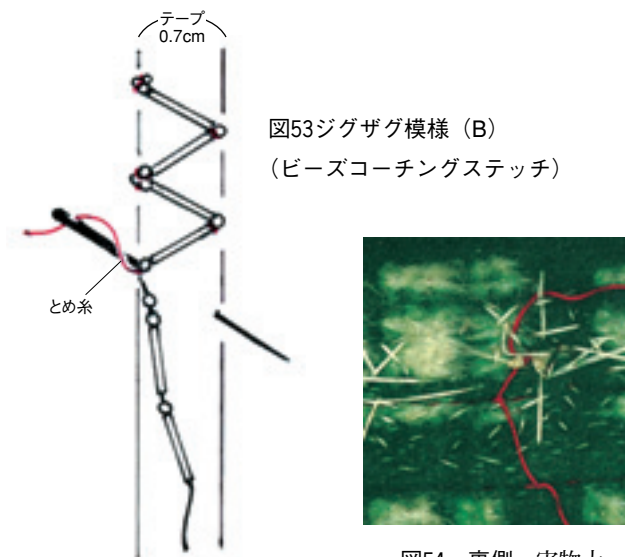


図53ジグザグ模様 (B)
(ビーズコーチングステッチ)

図54 裏側 実物大

⑤ 肩を接ぐ

最後に肩を接ぐ。接ぐ方法は手縫いまたはミシンの目を大きくして縫う。

4) 考察

「ビーズ刺繍」について

「成人女子」のジグザグ模様 (B) はコーチングステッチを用いている。先に規則的にビーズを通してあるものを、止めつけていくために作業が容易なことが利点である。

しかし良く見ると、ビーズの止めが数点外れている。これはバックステッチのようにビーズが布に密着していないために引っかかり易く、その部分が切れてしまったためと考える。

「少女」はジグザグ模様 (A)、花模様ともバックステッチし、起毛した布地や、ベルベット地にしっかり止まり、また図柄の形状も美しく保たれている。

「成人女子」、「少女」とも表地と裏地を重ねて刺繍するのは、芯の代用、つまり糸をしっかり引くことが出来るためと考える。

「着丈」について

サイズの変更が出来るように前後の肩接ぎは最後に手縫いする。これは体型の変化に合わせて、直し易くする工夫である (図49、図50の点線の部分)。また中には脇接ぎも同様な工夫をしてあるものもある。

◆図柄の写し方 (ベルベット地などの場合) はベルトの考察で述べる。

3. ベルトのビーズ技法

トランシルヴァニア地方の衣裳 (図3) に用いられているもので、ベルトのことをコルドン (Cordon) という。

ベルト (5 cm (幅) × 84 cm) の両側に、紐 (1.5 cm (幅) × 18 cm) をつけ後ろで結ぶ形態である。

蝶、花模様などの自由な図柄が施されている (図55)。

1) 図柄—花模様、蝶模様など

2) 材料—表布 生地名 ベルベット地

素材 絹100%

組織 漆毛織

厚さ 0.4mm

裏布 生地名 サテン

素材 絹100%

組織 平織

厚さ 0.12mm

厚紙 素材 絹100%

組織 平織

厚さ 0.12mm

ビーズ 丸ビーズ1.4~2.2mm (幅) × 2.1~2.3mm

止め糸 40~50番カタン糸

3) 製作

① ベルベット地に厚紙を裏当てし、駢をする。

② 図柄の印を付ける

小麦粉を水に溶き筆につけて、図柄を見ながらベルベット地に描く。

③ ビーズ刺繍する

花びらにあたる部分 (ア) は「ビーズパディングステッチ (Bead padding stitch 図56、図57) で立

体的に刺し、放射状の花（イ）はビーズストレートステッチ（Bead straight stitch 図56、図58）で刺す。茎の部分や葉（ウ）は、ビーズバックステッチ（Bead back stitch 図56、図31）する。

いずれの方法も、厚紙まで掬って止めつける。

④ ベルトに製作する

両端に紐を付け、裏地を当て仕上げる。

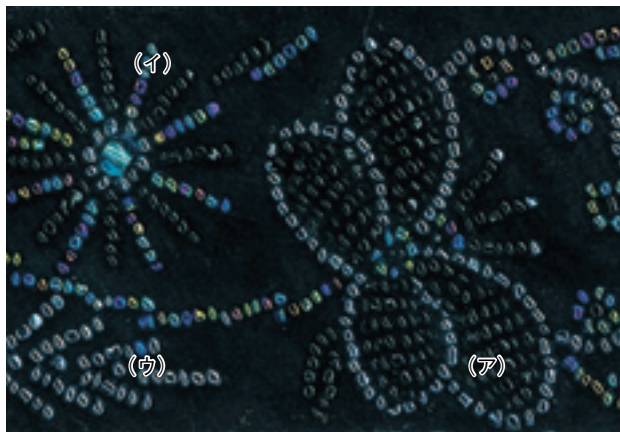


図56 花模様の図柄 実物大



図55 ベルト

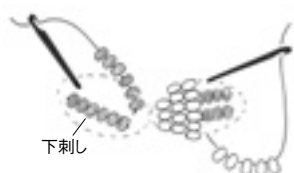


図57 ビーズパディングステッチ

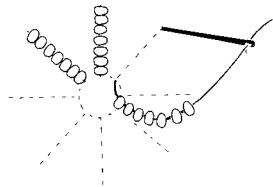


図58 ビーズストレートステッチ

4) 考察

「ベルベット地（起毛した布地）図柄の転写」について

メラ村では、小麦粉を水で溶いたもので図柄を転写する。

小麦の分量が少ないと図柄が鮮明でなく、多いと乾いてからその部分が硬くなる。掻き回すことでグルテンが出て、筆の運びが悪くなる。

それには少しずつ溶き、時間をかけずに描くのがポイントである。小麦粉はどの家庭でも常備している点で、手軽に転写が出来る。

他の方法に、「胡粉の転写方法⁽¹⁸⁾」がある。

この方法は色の濃淡も調節でき、細い線も楽に描くことが出来、しかもその部分が硬くなることもない。また筆の運びもよい。

いずれの方法も水を付けて消すことが出来る。

4. ブラウスのビーズ技法

トランシルヴァニア地方東北部、ブコヴィナ地方に見られるもので（図3）ビーズを施したブラウスをイエ・ク・マルジェーレ（ie cu margele）という。

ルーマニアの特徴でもある首回りにスモッキング技法と、袖に花柄のビーズ区限刺繍、ビーズハーフクロスステッチ（Bead half cross stitch）を施したものである（図61、図62）。

またこの地方のビーズ刺繍はビーズの傾斜を段毎に変えて刺すのが特徴である。（図63）

1) 図柄—花柄

2) 材料—表布 生地名 手織天竺地

素材 木綿100%

組織 平織

密度 経22 緯24（本/cm）

厚さ 0.4mm

ビーズ 丸ビーズ1.0～1.5mm（幅）×1.6～2.0mm

密度 経5.5 緯7（粒/cm）

止め糸 40番カタン糸

3) 製作

① 刺繍布の準備をする

手織り木綿地を裁断し（図59）、袖に、刺繍する位置（図60）を決める。

② ビーズ刺繍する

図柄の色を見ながら、ハーフクロスステッチする要領で、ビーズで埋めていく。

掬い方で右傾斜、左傾斜になり、段毎に傾斜を変えながら刺し進める（図65）。

掬い方は縦方向で、途中から横に変えることはない（図64）。

このブラウスの場合、1粒のビーズは、織り目、4目×4目（約1.6mm 正方）である。

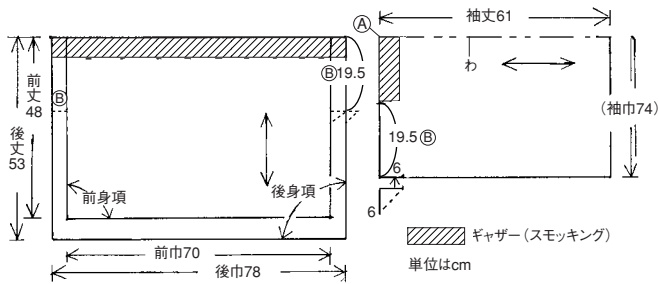


図59 身頃及び
袖 (製図)

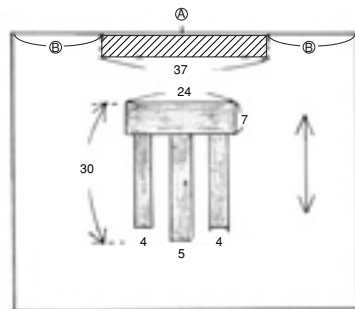


図60 ビーズ刺補位置
(袖)



図61 ブラウス



図62 花柄刺繍
(袖)

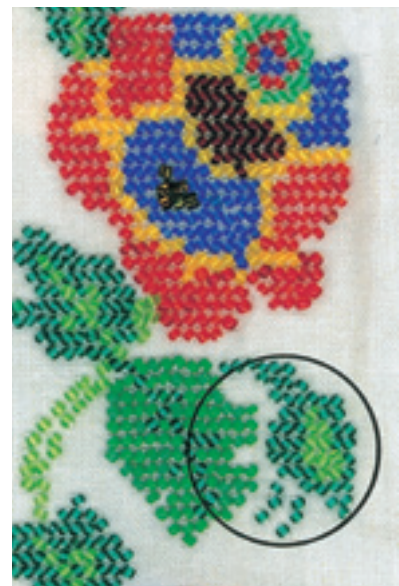


図63 ビーズ刺繍 (表) 実物大

4) 考察

「ビーズの図柄」について

ルーマニアの特徴である区限刺繍と、ハンガリーに見られる花模様が特徴である。

ビーズを傾斜さし、また傾斜させたビーズを段毎に変えることで陰影の面白さを出している。

そのためには、ビーズの形状が関係してくる。このブラウスに扱われているビーズは少し長手で、幅は1.0~1.5mm、長さは1.6~2.0mmである。この縦長の形状が重要である。

写真(図63、図64)の、○は同じ部分を表す。

Ⅶ まとめ

メラ村のエプロンの特徴は、ビーズを不安定な毛糸刺繍の上に施している点である。

なぜ、不安定な毛糸刺繍の上にビーズを安定させられるのか。その技法を可能にしているのが「厚紙」である。しかし細かな針の出し入れに、「厚紙」の破れるおそれが出る。それを防ぐのが、「当て布」である。「当て布」は厚紙を補強するだけでなく、さらにその上に施す毛糸刺繍の「台紙」としての役割もある。

その「台紙」をつくる重要な要素は、「厚紙」の厚さと腰である。



図64 ビーズ刺繍 (裏) 実物大



図65 ビーズハーフクロスステッチ

入手できる、メラ村の「厚紙」に近いものを探した結果、「土佐張子A」であった。

「土佐張子」A、Bと2種類あるのは、素材の違いと手漉きのためその都度厚さが一定しないためである。

使用に適する紙は、針通りが良く、毛糸刺繍やその上に施すビーズ刺繍に耐えられるもの、つまりメラ村程度の厚さと腰がポイントである。

ビーズを台紙にしっかり止められる技法は「ビーズバックステッチ」である。この方法は、不安定な毛糸刺繍の台紙に、緩みなくしっかり止めつけられる。

「ビーズバックステッチ」の見分け方は、裏側に出た糸の流れである。つまりバックステッチは図柄の形に糸が渡るからである。同じような方法を用いているのが「ベルト」である。

また裏布を重ねて刺すことでビーズ刺繍を容易くしているのが「ベスト」や「ビーズダーニングパネル」である。これらも布の裏側を見ることで「当て布」をすることや、「刺す方向」がわかる。

「止め糸」を2本取りにしているのは、1本取りより強く引き締められる理由である。

「止め糸」に赤あるいは白色を用いる点は、表布が毛糸刺繍やベルベット地のように起毛し、また厚地で織り目の粗いコングレス地はビーズが布地に埋まるた

めに糸が表に出ることがなく、言い替ればどんな色でも良いといえる。事実、刺繍の裏を見ると表のビーズに関係なく途中から別の色で刺されている。

その点、起毛がない平坦な布地はビーズが埋まらない点で、ビーズの色に合わせた糸で止めつける必要がある。

ブラウスはルーマニアでよく用いられる木綿の手織り布である。この布地の利点は布目を拾って区限刺繍が出来る、つまり、「ビーズハーフクロスステッチ」が可能である。

「ビーズの形状」に2通りあり、1つはビーズの傾斜をいかせる長手の形状でブラウスに適し、もう1つは丸手の形状で、縦、横ともに寸法の違いが少なく面を埋めるエプロンに適している。

日本で入手出来るチェコ製、丸手のタイプ(丸小ビーズ)を見ると、このメラ村のものと同じもので、幅1.2~1.4mm、長さ1.2~1.4mmであった。

なおメラ村を含むトランシルヴァニア地方のビーズもチェコ製のものを使用している。

メラ村で披露して頂いた、お家の若い夫人は、10数枚のエプロンを保持していた。しかもその技法は多岐にわたり変化に富んでいた。これはその近くの夫人にも、同様なものを見ることが出来た。

衣裳は行事ごとで素材や図柄を使い分けることはない。伝統の図柄を各家に保持し、多少その中に自分らしいもの(例えば刺繍エプロンにビーズを入れるなど)を加える程度である。

ましてスタイルを替えること(プリーツの幅、着丈など)などなく、あくまでも伝統の形から脱することはないのである。



本文をまとめるにあたり、こうした衣裳を快く披露して頂いた、メラ村の Palfi Eniko 氏、衣裳をお譲り頂いた Horvath Kati 氏、ルーマニア政府観光局東京所長 Alexandru Șerban 氏、通訳の Cornelia 笠原氏、またルーマニアの紙及び和紙の分析をして頂いた高知県立紙産業技術センター製紙技術部長、関正純氏の方々に厚く御礼申し上げます。

註

- 1 C. D. ゼレティン『ルーマニア民族衣装集』光文社(1975)
- 2 区限刺繍 (Counted thread stitch)

決められた本数を、規則的に布目をひろって図柄を作るもので、代表的な技法にクロスステッチ (Cross stitch)、ハーフクロスステッチ (Half cross stitch)、テントステッ

チ (Tent stitch) などがある。

- 3 小学館「大日本百科事典」No.15、pp.10-11、No.17、p.424
- 4 ビーズネックレス、マルジェーレ (Margle)
縫い針でビーズを用いて編み上げた網織り⁽¹⁹⁾である(図66)。



図66 ビーズネックレス

- 5 イースターエッグ、オウァ・デ・パシェ・ティ・デコラテ (Oua de pasti decorate)
イースターをはじめクリスマスなどに飾られるもので、ビーズのネックレスと同様、網織りされたものである。横(胴回り)の中心から編み始め。外側に編み進める。(図67)



図67 イースターエッグ

- 6 マッシュルームブリーツ (Mushroom plaits)
きのこの傘の裏襷のように見える襷のことで、襷奥が深く立ったような状態のブリーツのことである。
- 7 コロニツァ (Coronița)



若い女性の頭飾り(帽子)である。カチューシャの部分は8×50cmの半円形、後側に20.5×19cmのプレートが付き、そのプレートには7cmおよび10cm幅の花柄リボンが4枚ずつ3段、12枚付く。全長75cmである。カチューシャやプレート部分にはビーズがふんだんに使われ、重さは約950gである。(図68)

図68 コロニツァ

- 8 被り物、フークトゥ (Fökötö)、チプケ (Csipke)
結婚式を終えると、フークトゥ、チプケをつけその上からパティクを被る。これは周囲に結婚したことを伝える

ものである。フークトゥは粗いネットに毛糸でウイーヴィングステッチ(Weaving stitch)したもので、その帽子の先端の膨らみは、髪の毛を丸めて収めるようになっている(髪の毛の短い人はその部分にタオルを丸めたものを詰める)。チプケはビーズを糸で組み上げた網織りである。(図69)この上からパティクで被う。



図69 被り物(左)

図70 パティク(下)



- 9 パティク (Batic)
スカーフのことで、フークトゥ、チプケの上を被うだけでなく、年代に関係なく普段にも用いられる。(図70)
- 10 飾り紐 シュヌール (Șnur)
ビーズ刺繍を施したプレート(幅3cm、長さ26~29cm)に、毛糸の房(26cm)をつけ、木綿織テープ(幅約2.5cm、長さ90~140cm)の両端に付けたものである。それを2つ折りし、ベストの後首割り中心より下げる。下げた寸法は約1~1.2mである。装飾を目的としている。(図71)



図71 飾り紐

- 11 川口素子「ルーマニアの民族衣装と、そのギャザーについて」(「杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要」3号、2004、pp.46-48)
- 12 チェスト (Chest)
プリーツスカートを巻いて棒状にしたものを入れる箱である。家具に花柄をペインティングするのは、この地方の特徴である。(図72)



図72 チェスト

13 ルーマニアンステッチ (Rumanian Stitch)



やや長めに渡した糸の中心を、やや斜めまたは直角に止める方法で、ブラウスやエプロンの接ぎ、またエプロンの縦プレート「台紙」にも用いられる。(図73)

図73 ルーマニアンステッチ

14 スモッキングパネル (Smocking panel)

「横パネル」に使われる。

規則的に縦襷を寄せ、ニードルポイントのように隙間なくスモッキング技法で埋めるものである。縫い縮めるという意味のウクラティツラ⁽¹¹⁾ (Încrătutura p.44) の一種である。

この技法は伸縮が少ないためパネル装飾に適している(図74、図75)。



図74 スモッキングパネル



図75 刺し方

15 帽子飾り ズガルダ (Zgardă)

男性の帽子飾りで、婚礼、祭りに用いられる。厚紙を芯に布を張り、ビーズバックステッチで装飾してある。(図76)



図76 帽子飾り

16 Tözegi, T. (2003) *A mérai kötény. Cluj- napoca: Șorțul din Mera* No.59, No.68, No.82

17 紙、板紙およびパルプ繊維組成試験方法

9 JIS-P-8120:1998 高知県立紙産業技術センターの

検査による

18 川口素子「トルコの Maras 刺繍とその応用技法」(「杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要」1号, 2002, p.42)

19 C. クラブトゥリー、P. スタールプラス『世界のビーズ文化図鑑』福井正子訳 (2003) 東洋書林 p.188

試 料

『スカート』

「成人女子」(図7)

着丈 90cm ウエスト寸法—フリー

プリーツ 1cm (幅) 195襷

用布 (横地使用) 92cm (幅) × 392cm

ウエストのベルト部分は別布を使用

表布 生地名 ウール

素材 ウール100%

組織 平織

密度 経20 緯26 (本/cm)

厚さ 0.38mm

テープ (リボン) 絹地花柄手描 2.6cm (幅)

木綿花柄織1.8、2.4、3.6cm (幅)

化繊レース2.3、2.5cm (幅)

以上の幅のテープを12本組み合わせて (計31.5cm) 使用。

「少女」(図8)

着丈 73cm ウエスト寸法—フリー

プリーツ 1cm (幅) 132襷

用布 90cm (幅) × 225cm

生地名、素材、組織、密度、厚さは成人女子と同一

テープ (リボン) 木綿花柄織 1.5、3.3cm (幅)

木綿レース 1.5、1.8、2.0cm (幅)

サテンリボン0.7cm (幅)

絹ジャバラコード0.7cm (幅) 以上の幅のテープを11本組み合わせて (計18.5cm) 使用。

「娘」(図9)

着丈 90cm ウエスト寸法—フリー

プリーツ 1cm (幅) 150襷

用布 (横地使用) 92cm (幅) × 302cm

刺繍布 (裾部分)

用布 15cm (幅) × 302cm

生地名 ラシャ

素材 ウール100%

組織、密度とも起毛のため計測不可能

厚さ 0.7mm

絹刺繍糸

『エプロン』

「成人女子」(図22)

着丈 87cm

用布 92cm (幅) × 90cm

表布 生地名 モスリン

素材 ウール100%

組織 綾織

密度 経30 緯21 (本/cm)

厚さ 0.2mm

「少女」(図23) (10歳位)

着丈 66cm

用布 88cm (幅) × 70cm

生地名、素材、組織、密度、厚さは「成人女子」と同一

参考文献

- Tancred, B., Gheorghe, F., & Emilia I. (1957). *Port tesaturi cusaturi*. Sibiu: Pentru.
- Elena, S., & Paul, P. (1984). *Portul popular de Sărbătoare din România*. Sibiu: Editura meridiane.
- Mircea, M., & Tancred, B. (1980). *Rumänien*. Romania: Editura Sport-Turism.
- Ligia, F., Gabriela, C., & Anca, C. *The Textile Heritage*. Braşov [Ethnographic Museum].
- Edit, F. (1961). *Hungarian peasant embroidery*. London: B.T. Batsford.
- Nicolae, D. (1986). *Meşesugul şi Arta acului*. Bucureşti: Editura Tehnică.
- Totszegi, T. (2003) *A mérai kötény*. Cluj- napoca: Şortul din Mera.
- 『ハンガリーの花刺繍』(1996) エービータイム

参考博物館

Cluj- napoca [Muzeul de istorie al Transilvaniei]
Bucuresti [Muzeul national de arta]
Braşov [Ethnographic Museum]

参考衣裳

トランシルヴァニア地方クルージュ県メラ村
成人女子の衣裳 (図7)

ブラウス (Cămaşă Rotundă) 20世紀前期

ベスト (Vesta) 20世紀中期

プリーツスカート (Fustă Plisată) 20世紀中期

エプロン (Şorţ Plisată) 20世紀中期

スカーフ (Batic) 20世紀後期

トランシルヴァニア地方クルージュ県メラ村

少女の衣裳 (図8)

ブラウス (Cămaşă Rotundă) 20世紀前期

ベスト (Vesta) 20世紀前期

プリーツスカート (Fustă Plisată) 20世紀前期

エプロン (Şorţ Plisată) 20世紀前期

スカーフ (Batic) 20世紀前期

トランシルヴァニア地方クルージュ県

女性の衣裳 (図3)

ブラウス (ie cu mărgel) 20世紀前期

スカート (Poale Cătrintă) 20世紀前期

エプロン (Cătrinte) 20世紀前期

ベルト (Cordon) 20世紀前期～中期

女性の衣裳 (図4)

ブラウス (Cămaşă) 20世紀前期

スカート (Poale Cătrintă) 20世紀前期

エプロン (Cătrinte) 20世紀前期

ベスト (Vesta) 20世紀前期

クルージュ県メラ村、少女の衣裳およびクルージュ県の衣裳は筆者所蔵品。メラ村、成人女子の衣裳は杉野学園衣裳博物館の所蔵品を、それ以外の写真は現地で許可を得て筆者が撮影した。